

---

# 魔導戦記リリカルなのはStratoS

杉並

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔導戦記リリカルなのはStratos

### 【Zコード】

Z2552BA

### 【作者名】

杉並

### 【あらすじ】

3年前の第2回IS世界大会モンド・グロッソ、織斑千冬は弟の一夏よりも「ブリュンヒルデ」という称号、栄誉を優先した。絶望する一夏だったが、彼は別の青年に助けられそして自らの意志で別の道を進むことを決意しこの世界を離れた。3年後に戻ってきた彼の目に自らの生まれ故郷はどのように映るのだろうか…

魔導戦記リリカルなのはStratos、始まります。

この物語を読んでいる途中で違和感を感じる方も出てくると思いま  
すが、それはこの物語に私の個人的な考え方や設定等が含まれている  
ために起こっていると考えられます。大変申し訳ないのですが、予  
めその点をご理解していただけたらと思つております。

## 第1話「出会い」（前書き）

読切り累計アクセス数が1000を超える、ストーリーの方も少しすつですが出来上がってきたので、このたび連載することを決意しました。

更新は最低でも週1のペースを崩さずこにやつていけたらと思つります。

第1話は読切りと変わつていないので、すでに読んだ方は第2話からお進みください。

それでは本編の方へ

その出会いがなければ…あの手を掴まなければ…俺はこの世界で何も知らず、ただ世界に流されて生きていたのかもしれない。だけど俺はその手を掴んだ。今の自分を変えたいと思ったから。選んだ道がどんなに辛くて苦しくても俺は進み続ける…それは自分で進むと決めた道だから。

魔導戦記リリカルなのはストラatos 第1話「出会い」、始まります。

## 第1話「出会い」

結局、自らの姉は俺を助けには来なかつた。彼女は9つ下の弟の命よりも「ブリュンヒルデ」という称号、栄誉を優先したのだ。

薄汚れた廃工場の柱の一つに縛り付けられながら少年は絶望した。

お前の家族は私だけだ

両親が消えた時に姉が俺に言い聞かせた言葉が思い出された。あの言葉は嘘だつたのか…俺はその言葉を信じて今まで生活してきた。わがままも言わず、姉の不慣れな家事も全部担当してきた。なのに、それさえも否定されたように思えた。

そんな時だつた。青白く光る閃光が壁を打ち抜き、俺の周りにいた数人の誘拐犯を吹き飛ばしたのだ。

壁を打ち抜いて廃工場の中に入つて來たのは青のラインが所々に入つた白い服を身に纏い、両手に銃 そうはいつても普通の銃ではなく、ロボットアニメに出てきそうな銃 を持つた一人の青年。

先ほどの青白い閃光に唯一巻き込まれなかつた誘拐犯がようやく我に返り、 I S うちがね 打鉄 を身に纏い、入つてきた青年に何か叫んだ。

当時の記憶が既にあやふやになつていてもあつてか、何と言つていたのかは詳しく述べていなが、「何者だ貴様、止まれ!」みたいなことを言つていたのだろう。

しかし、その青年は聞く耳を持つていてないのかお構いなしに歩を進める。

それに激昂した誘拐犯は近接用ブレードを展開して青年に突撃した。

ISに勝てるのはISだけ

それがこの世界の一般常識だつた。そしてそのISを扱えるのは女性のみ。この場面のみを誰かが見ていたのならその誰もがISを纏つた女性が勝つと信じただろう。

だが、その予想は大きく外れることになる。

その青年は右手に持つていた銃を誘拐犯に向ける。その銃口には青い光が集まつていた。

もしこの時、誘拐犯が冷静な判断ができていれば結果は違つていた

のかもしない。その銃口に集まっている光の色が自分の仲間を吹き飛ばした青白い閃光と同じ色であつたことに気付き、とつと回避していればあんな一瞬で終了することはなかつたのかもしない。

「考えもなく怒り狂つて突つ込んでくるのは頭の悪い奴がやることだ。」

青年は呆れた口調でさう言い、銃の引き金を引いた。

その瞬間、銃口に集まっていた青白い光は誘拐犯に向かつて解き放たれ、その言葉通り「うう」と誘拐犯を呑み込み、反対側の壁を打ち抜いて吹き飛ばした。

「やばい、出力抑えたはずなのに…またなのはに怒られるな。」

青年の顔はやつすぎたといった表情をしながらも俺のやばさにやつて来る。

「ちよつと動くなよ。」

そつ言いながら銃口から放出される青白い光をナイフのよつた形に固定して俺を縛っていたロープを切断。そして俺の頭に手を乗せてこつ言つた。

「一人でよく頑張ったな、もう大丈夫だ。」

たつた一言。だけどその一言が俺の心にため込んでいた何かを一気に放出させた。少年は助けてくれた青年にしがみついて泣いた。ただ、ただ泣き続けた。

数年後、あの時どうして泣いていたのかを聞いてみると少年は恥ずかしそうにこいつ言った。

「あの時の俺は、多分さびしかったんだと思います。」と。

どんなに頑張つても褒めてくれる人はいなかつた。運動会で1位を取つても、テストで満点を取つても誰も褒めてくれず、「取れて当然」のような反応をされてきた。ずっと姉と比較され続けてきた。だけど、ただ一人の家族である姉のため、とひたすら我慢してきた。だけど、本当は褒めてほしかつた、一緒に喜んでほしかつた。たつた一言でいいから「頑張ったね」と言つて欲しかつた。

しばらくたつて俺は落ち着きを取り戻し、そしてサイレンの音が鳴つていてるのに気付いた。その音はだんだん大きくなつていることがらこちらに向かっているのだろうと簡単に予想できた。先ほどの爆発音を聞いて黙つている人の方が少ない。

俺を助けてくれた青年は周りの状況を理解しているのか「巻き込まれたら面倒だからさつさと帰るか」と言つて去るうとしていた。そんな彼の手をいつの間にか俺は掴んでこう言つた「俺も連れて行ってください」と。

いきなり手をつかまれた彼は最初は困惑していたが、俺の目をじっと見てこうつた。

「俺が進んでいる道は険しくてつらい。それでもついてくる覚悟が君にはあるか?」

俺は彼のその眼を見て彼がその言葉の通り今まで非常に厳しくつらい経験を踏んで来たのだろうと感じた。その中には悲しい別れもたくさんあつたのだろう。もし彼と同じ道を進めば俺も同じ経験をすることになるのかもしれない。だけど俺はこの世界を自分の目で自分の肌で自分の身で知りたいと思つた。たとえどんな悲しい経験をしたとしても俺は知りたいと思つた。

だから俺は「はい」と言つて掴んだ手をギュッと握りなおした。

少年は「魔法」と出会い、自分が生きてきた世界の、そして両親失踪の本当の真実を知る。

自分の世界に潜む闇を知り少年はどう思うのか。

物語はこの事件の3年後、この世界に再び少年が戻ってきたところから始まる。

胸に抱くは不屈の心、その手に持つは魔導の力。  
愛機と共に立ち向かうは女性にしか扱う事の出来ない兵器、インフィニット・ストラトス。

魔導戦記リリカルなのはStratos

青年との偶然の出会いが少年の運命を拓き、少年 高町一夏 は空を駆ける。

## 第1話「出発」（後書き）

「」意見や誤字脱字等の指摘がありましたら感想の方にお願いします。

オリジナルキャラクター（以降、オリキャラ）はできる限り第1話に出てきた謎の青年以外には出れないように進めていく予定です。（オリキャラを出しちぎると読みにくくなつたので…）

### 第2話「入学」

世界で初めて男としてHISを起動をせてしまつたことによつHIS学園への入学を強制される一夏。 HIS学園への入学は一夏にとって吉となるのか凶となるのか。

## 第2話「入学」（前書き）

お待たせしました、記念すべき連載第2話です。

今回の物語はIISの世界を軸として、その世界になのはのメンバーが関与していくといった話にする予定です。

第2話では、なのはの主要メンバーがほんのちょっとだけ出でてくるかも。

## 第2話「入学」

「（…いぐりセシルが同じクラスにいるからってこの状況はさすがにきつい。）」

俺以外のクラス全員… というよりもこの学園に通う生徒は俺以外全員女子生徒。学園職員も用務員に成りすましている本当の学園長を除いて全員女性。それに加えて座席が最前列ど真ん中というクラスほぼ全員からの視線を集める絶好の位置。まさに四面楚歌。

「（藍越学園で学生をしながらこの世界の状況について調べてくるのが今回の俺の任務の目的だったのに、よりによって座標ミスって転送位置がズレただけじゃなく、飛ばされた場所に置いてあつた工Sに触れて起動させちまうなんてな… マジで情けない）」

ちなみにそのことをみんなに話したら「いやいやさすがにそれはないでしょ」って顔された。太一さんとタヌキ（はやて）さんについては大爆笑。

俺はあの時ほど「穴があつたら入りたい」と思つたことはない。

「（しかもそのせいで世界で初めてEVAを動かした男という立場からEVAを調べてこいつていう追加任務まで課せられるなんて… 鬱だ。）」

「はあっ」と大きなため息をつく。しかし、何事も前向きに考えるという持ち前の性格ですぐさま気持ちをあらため、この3年間で習得した並列処理を活かして現時点で発生している問題とその解決策について考えていく。

「（まあ、起きてしまったことはしようがないとしてこれからどうするかだな。国籍についてはイギリス政府の努力もあつて自由国籍権を取得できただけど今後どうするのかを考えていかないといけない。ISの情報収集についてはこの学園に入学したことで藍越学園にいる場合よりも洗練された情報が入手できる、ISがどうして俺に反応したのかについては実際にISに乗つて調べてみないとわからない、それから俺の機体は…）」

並列処理は一般的な魔導師で3つか4つ程度しかできない。これは人間の脳が与えられた情報を処理する能力に限界があるためだが、一夏はそれを最大15個まで並行して考えることが出来る。現在並行して考えている情報は10個、あと5つ考えることが出来る点を考慮すれば脳への負荷はそれ程大きくはない。だが一夏は8個以上の情報を並行して考える時、脳への負荷を小さくしようとして思考のみに意識を集中させてしまうという癖があった。

だからだろう、教室に副担任が入つてきて自己紹介したのにも、クラスメイトの自己紹介が始まつたのにも気づかなかつたのは…

「…ちかくん、高町一夏くんつ」

「くっ、あつはー。」

下に向かっていた顔を上にあげると副担任の…確か山田先生（下の名前は忘れた）が机の前まで来て俺の名前を呼んでいたこと、そしてまたいつも悪い癖が出ていたことに気付く。どうやら自己紹介が始まつていて俺の順番まで進んできていたらしく。セシルの方をチラリと見ると「またですか、わ~」といった顔をしている。

「あつあつ、お、大声出しちゃって『ゴメンね。お、怒つてる？怒つてるかな？』『メンね、本当に』『メンね！』でもね、あのね、自己紹介が、『あ』から始まつて今『た』の高町くんの番なんだよね。だからね、『』、『ゴメンね？』自己紹介してくれるかな？それともやつぱり、だ、ダメかな？」

田の前で山田先生が今にも泣き出しそうな声で頭をペリペリ下げてお願いしていた。

「あ、ちょっと失禮していただけなので怒つてしませんし、そんなに謝らないでください。自己紹介もちゃんとしますから、先生落ち着いてください。」

「ほ、本当にですか？本当にですね？や、約束ですよ。絶対ですよー。」

：本当にこの人は教師なのだろうか、という疑問を持ちながらも一夏は立ち上がり、後ろを振り向く。今まで背中に感じていた視線を今度は正面から浴びる格好。

「（なのは姉も教導の際にこんな感じでいろんな視線を浴びてたんだな…）」

自分の義姉のなのはが教導官として多くの魔導師の前に立つた際に浴びる視線に近いものを自分も浴びてことに気付き、一瞬しみじみとした思いになりながらも気持ちを引き締めてこいつを呟つた。

「初めまして、イチカ・タカマチです。日本生まれのイギリス人でしたが、現在は様々な国の思惑のせいで自由国籍権を取得し、所属は決まっていない状況にあります。変に馴れ馴れしく接すると国際問題になりかねないのでその点にはみなさん注意してください。」

## 第2話「入学」（後書き）

とこうじとで第2話でした。いかがだったでしょうか。これからもコツコツと話を進めていく予定ですので、今後も宜しくお願いします。

ご意見、ご感想、誤字・脱字等につきましては感想の方にお願いします。

次回、第3話「再会」

一夏はこの学園で会いたくなかった人と3年ぶりの再会を果たす。

### 第3話「再会」（前書き）

現在第4話 + 主要人物紹介を鋭意執筆中。

主要人物紹介はおそらく一夏が篠と話をした後くらいになるかと思  
います。

では本編の方へ。

### 第3話「再会」

Side一夏

自己紹介を終えた瞬間、自分の頭めがけてナニカが振り下ろされることに気付いた。自己紹介中に誰かが前のドアから教室に入ってきたのには気づいていたから、その誰かが俺に対してナニカを振り下ろしているのだろう。

「（…山田先生じゃないな。）」

山田先生は俺の方で「た、高町くん、その、そういう自己紹介だと、お、お友達、できないよ。もうちょっと、じ、自分の趣味とか、と、特技とか話してくれないかな？」みたいな表情をしてこっちを見ているからだ。

そんなことを考へている間にも俺の頭に近づいてくるナニカ。そしてそれが頭に直撃する寸前、そのナニカは山田先生の顔の前を通り過ぎ、教室のドアにぶつかった。一夏はそれが何であるのかを横目でちらりと確認すると薄い長方形の形をしたものであることを確認した。蹴り飛ばした時に感触からあれが出席簿だろうと推測。そして再び視線を前に向けると、そこには一度と会いたくもなかつた人物が立っていた。

Side out

### Side セシル

「（先ほどのシーンはみんなの目にはじのよつに映つたのでしょ  
うね…おそらくは、黒板に背中を向けていた一夏さんがいつの間に  
かこちらに背を向けていて、担任と思われる人の手にあつた出席簿  
がこれまでいつの間にか教室のドアにたきつけられていた程度の  
認識しかできていないのでしょつけれど。）」

頭に振り下ろされていた出席簿を一瞬で蹴り飛ばした一夏の姿を見  
ながらセシルはそのようなことを考えた。その一連の動作が完了す  
るまでにかかった時間は1秒にも満たない僅かなものであったから  
だ。その様子をただ見ていただけのクラスメイトのほとんどはセシ  
ルの考えているよつにしか先ほどのシーンを認識できていないこと  
は間違いない。

「（それとほんの僅かではありましたが、一夏さん、魔法を使用し  
たみたいですね。使用した魔法は身体強化と出席簿を蹴り飛ばした  
右足の加速…といったところでしょう。）あちらは後ほど一夏さんに  
確認をすることにしましても…自らの姉だつた方が担任になるなん  
て、一夏さんにとっては大変いやでしょうね。もちろん私が一夏さ  
んの立場でしてもこちからお断りしたいほじやですけれど。）

セシルはそのようなことを考えながらも一夏と彼の目の前に立つて  
いる教師をジッと見る。一人とも無言ではあるが、一夏の目が相手  
を射殺すかのような目をしていることにセシルは気付いた。そして  
次の瞬間、一夏の口が動いた。

Side 一夏

この学園で教師をしていることは知っていた。だが、自分の担任になるとは思っていなかった。その教師の本来の担当学年は3年であり、そしてこの学園の教師の担当学年が変更になつたことは今までにないということを事前調査で確認していたからである。

「（…俺という男性操縦者<sup>インギニア</sup>とそれによつて発生する可能性の高い俺を巻き込んだ事件に対しても迅速に対応できるだけの判断力や実力を持つた教師を選んだということか。やっぱりあの用務員<sup>がくえんじょ</sup>、ただ者じやないな。となると、頼りなさそうな感じではあるけど山田先生も相当の実力の持ち主つてことになる。）」

顔には出していながら、今までに得られていた情報とは異なる事実に一夏は内心、驚いていた。しかし、すぐさま気持ちを切り替え、そこから得られる情報や考えられる可能性について導き出していく。そして、そのようなことを考えながらも一夏はこう思つていた。

「（…しかしまあ、よくも何事もなかつたかのような顔をして俺の前に立てるな。）」

そう、目の前に立つのは3年前、家族の命よりも自らの肩書・栄誉を優先した人間、織斑千冬だった。そのような人を前にして一夏は

いつ言った。

「いきなり、しかも後ろからあんなものを無防備な生徒の頭めがけて振り下ろすなんて、教師としてなってないんじゃないですかブリュンヒルデ、いや織斑先生。」

Side out

3年前の誘拐事件から約3年、2人の姉弟は再会を果たした。姉であつた千冬にとつては嬉しい再会だつた。何せ3年間行方の掴めなかつた弟が今、田の前に立つてゐるのだから。

しかし、弟であつた一夏にとつては「一度と会つ」とはないと思つていただけのこともあつてか最悪の再会であつた。

### 第3話「再会」（後書き）

3年ぶりの再会は感動の再会…にはなりませんでした。出来る限り原作に忠実に、しかしオリジナリティを加え原作とは違ったストーリーで物語を進めていますが、「もつとこつしてほしい。」「こういった展開が見たい」といったご意見がありましたら感想の方へよろしくおねがいします。

### 第4話「眞実」

イギリス国籍だった一夏が自由国籍権を取得せざるを得なかつた理由、そして皆が知らなかつた一夏誘拐事件の眞実の一端が今、明らかになる。

## 第4話「眞実」（前書き）

3年ぶりの再会… 本来であれば嬉しいもののはずなのに、その再会は彼 高町一夏 にとつては非常に不快なものだった。

魔導戦記リリカルなのはStratos 第4話「眞実」、始まります。

## 第4話「眞実」

「いきなり、しかも後ろからあんなものを無防備な生徒の頭めがけて振り下ろすなんて、教師としてなってないんじゃないですかブリュンヒルデ、いや織斑先生。」

二人の3年ぶりの再会で初めて交わされた言葉は感動的なものではなく…

「…それはお前の自己紹介の内容に問題があつたからだ、織斑。」

そしてその言葉に返された返事もまた冷たいものだった。

「問題…ねえ。ですが俺が言つたことは事実でしょ? IISを起動させてしまつた時の俺の国籍はイギリス国籍だつた。だからイギリス政府は俺をイギリスの代表候補生の一人としてこの学園に入学させることにした。だけど、いきなり日本政府が『彼はイギリス国籍を有しているかもしけないが、日本で生まれ、今までの人生の半分以上を日本で過ごしている。その点を考慮するならば彼の所属は日本にあるべきだ。』って主張した。」

「…」

「そして、日本政府のその発言を発端にアメリカやロシアなどの諸外国が何かと理由をつけて俺を自国の所属にしようとした。『敗戦国の日本の復興に大きく貢献した我が国は日本に大きな貸しがある。ならその貸しを彼の所属権を我が国に引き渡すことでチャラにしうじじゃないか』とか言つてね。完全に俺はモノ扱いだ。」

「えつ……そ、そんな…」

「事実ですよ、山田先生…話を戻します、各国の首脳は俺の所属を巡つて意味のない議論を繰り返した。連日、夜遅くまで…ね。」

「「「…」」」

一夏の口から出てくる自分たちの知らなかつた事実に、セシルを除く学生達はただ黙つて聞くことしかできなかつた。

「だけどいくら議論しても解決策が出でこないことに一部の国々（所属権を主張しなかつた国）の首脳たちが不満を持ち始め、そしてついに爆発した。『私たちは一体何のためにここに集められたのか』つてね。結局この不毛な言い争いはイギリス政府が『ならば彼に自由国籍権を与え、IIS学園に通つ3年間の中で様々な国の生徒と交流して、どの国に所属するのかを決めさせればよい。』と提案し、それを首脳たちが満場一致で賛成したことによつやく解決した。もちろんその提案に不満を持っていた国もあつたみたいだけど、それ以上に解決策も見えず、時間だけがただ過ぎていくことに不満を持

つていた首脳たちの方が多いかったから、認めざるを得なかつたんだ  
けどな… それと織斑先生、俺のファミリー・ネームはオリムラじゃな  
くてタカマチです。」

自らの自由国籍権取得の本当の真実を話し終えた一夏は、最後に織  
斑千冬が口にした間違いを訂正した。

「つ…いや、お前が何と言おつとお前は織斑一夏であり、私の…弟  
だ。」

その事実にクラスがざわついた

「え…？ 高町くんが、あの行方不明になつてた千冬様の…織斑先  
生の弟？」

「それじゃあ、ISに乗れるのもそれが関係してゐること? だけ  
ど、今の名字が『高町』になつてゐるのには何か理由があるの…？」

教室中に飛び交う様々な憶測、そしてその内容のほとんどが一夏と  
千冬の関係について。この一人の関係が良好なものであれば、教室  
中に飛び交う内容など特に気にするようなものではない。しかし、  
今の一夏にとつてその話題は苦痛以外の何物でもなかつた。

彼はあの事件の時、実の姉だつた人と決別すると心に決めた。「たつた一人の家族」と言いながら助けに来なかつた人を尊敬できる姉と見ることはもうできなかつた。

だからこそ一夏は片手を机にバンッと叩きつけ、クラスを黙らせてからこう言つた。

「『私の弟』だつて……？笑わせるなよ。あんたが、俺の……俺の姉であるものか！3年前のモンド・グロッソの決勝戦の時、俺の命よりも自らの栄誉を…肩書きを選んだ、あんたを姉…いや、家族だなんて認められるかよ！」

そう言い残し、一夏は教室から出ていった。この時間は本来授業時間なのだが、彼の口から発せられた驚愕の事実に、彼の行動を止めようとする者はだれ一人としていなかつた。

## 第4話「眞実」（後書き）

以上、第4話でした。

まえがきを見て『あれっ？』と思われた方もいるでしょうが、4話以降の本編の前書きはこの形で統一していこうと思っております。余裕があれば1～3話の前書きについても訂正していく予定です。それでは今回の話はこれで。

### 第5話「相棒」

屋上で一人、考え方をする一夏。そんな彼のもとに彼の相棒パートナーであり、良きライバルである彼女が訪れる。

## 登場人物紹介 その1（前書き）

タイトル通りの登場人物紹介です。

ここでは今までに出てきた主要（と思われる）人達の現時点までで分かっている情報が載っています。

キャラクターについては原作とは異なる設定になっているので、読んでいただかれた方がこの物語を理解しやすくなると思います。

## 登場人物紹介 その1

高町一夏：一応、本作の主人公（のはず）。旧姓織斑。12歳の時に開催されていた第2回IS世界大会「モンド・グロッソ」の決勝戦直前、織斑千冬の2連覇を妨害しようとした他国の者に誘拐されるが、とある青年によつて助けられ、魔導師としての道を進むことを決意する。本来はイギリスからの留学生として藍越学園に通いながらISに触れる情報を集め、報告するのが今回の任務であつたが、偶然ISに触れて起動させてしまつたため、『世界で初めて男性としてISを起動させた人物』としてIS学園への入学を強制される。一般魔導師でも4つ程度しかできない並列処理を最大15個まで出来るという技能を持つているが、8個以上の情報を処理する場合は思考に意識を集中させてしまう癖がある。ベルカ式を扱う空戦A-ランクの魔導師で階級は1等空士。弟の命よりも自らの栄誉を選んだ実の姉であつた織斑千冬やISを世に出し女尊男卑という歪んだ世界を作つた白騎士事件の犯人、篠ノ之束を嫌つている。

セシル：第2話から登場。今までの話の内容から一夏と知り合いである可能性が高い。また、一夏が出席簿を蹴り飛ばした時に魔力が発せられたことに気付いたり、使用した魔法の種類を瞬時に判断したことから、魔導師として高い素質を持つていると判断できる。

織斑千冬：一夏の姉だつた人物であり、クラスの担任。第2回モンド・グロッソ決勝直前、一夏が誘拐されたことを知るが、「助けに行くのは試合を一瞬で決めてからでも遅くはない」と考え、決勝戦に出場。しかし、決勝戦の対戦相手が自分の戦い方をかなり研究してきていたこともあつてか、決勝戦は予想以上に手間取り、一夏の

救出に向かうのが遅くなってしまう。現場に着いた時にはそこに一夏の姿はすでなく、どうしてあの時あんな安易な考えをしてしまったのかと後悔する。そして大会後、一夏がいないという事実から目を背けるために一夏誘拐の情報を提供してくれたドイツへ1年間、教官として出向く。そしてその2年後、一夏がISを起動させたことによって一夏が生きているということを知り、安堵し喜んだが、彼から「あなたが俺の姉であるものか」と拒絶されてしまう。

山田先生：一夏のクラスの副担任。下の名前は真耶。まや

一夏を助けた青年：双銃使いの謎の青年。一撃でISを倒すことが出来るほどの実力の持ち主であり、「なのは」と呼ばれる人とは何やら良い関係にあるらしい。

高町なのは：一夏の義姉。例の青年と何やらいい関係にあるらしい。彼女の両親が一夏を養子として引き取ったことで一夏から「なのは姉」と呼ばれている。

太一：第2話で名前だけ出てきた人物。一夏がISを起動させたことと聞いて大爆笑した人物の一人。

タヌキ：別名「はやて」。太一と同じく、2話に名前だけ登場。ノリとツッコミをモットーに生きている人間の姿をした愛嬌？のあるタヌキと。女性の胸をもむのが日課で、本人いわく「スキンシップ」らしいが、どこからどう見てもセクハラにしか見えない。謎の青年

いわく「ヒト科タヌキ属セクハラ種」の珍人類。

## 登場人物紹介 その1（後書き）

…どうも人じやなさそうなのが1人？混じつているようでしたが、それについてはあまり気にしないでください。

本編や番外編についても現在執筆中です。ご意見・ご感想お待ちしております。

## 第5話「相棒」（前書き）

掲載2日目にして累計PVが15000、そしてお気に入り登録数が50を突破しました。この小説を読んでくださっている皆様、本当にありがとうございます。作者杉並、より一層努力していく所存ですので、これからもよろしくお願いします。

それでは本編スタート。

大空を眺めながら一夏は一人考え事をする。そんな彼の前に現れたのは、この世界で生まれ育ち、彼と同じく魔導師の道を歩む女の子だった。

魔導戦記リリカルなのはStratos 第5話「相棒」、始まります。

## 第5話「相棒」

場所は変わつて IIS 学園の校舎の屋上、教室から出て行つた一夏は屋上に設置してある長椅子に一人、寝そべつっていた。休憩時間…特に昼休みであれば数人の生徒を見かける屋上も今がまだ授業時間であるため、彼以外の生徒を見かけることはない。

「（…飛び方は違うけど、あの人もなのは姉も俺の前に広がる青い大空を自由に飛び回つて、同じような景色を見ていた。なのにどうしてこんなにも一人は違つんだろうか…）」

目の前に広がる大空を眺めながら考えているのは一人の女性。一人は血のつながつた唯一の家族であり姉であつた織斑千冬。

家族の命よりも名聲を求めた女性おるがもの

そしてもう一人は、俺を助けてくれた人 鎌藤太一さん の恋人で、俺を養子として暖かく迎えてくれた高町家の次女、高町なのは。

姉としても、そして同じ魔導師としても尊敬できる強くて優しい女性。

ちなみに、一夏が太一の家ではなく高町家に家族として迎え入れら

れたのは、太一の家族（両親）がすでに他界していたためであった。それでも太一は家族として迎え入れる予定だったのだが、なのはの両親である高町士郎、高町桃子の二人が「彼に必要なのは親の愛情」と主張し、それを太一も認めたため、一夏は高町家の養子となつた。それに加えて、高町家の家族構成が一般的の家庭と少し違つていたことも関係していたりするらしい。

「（…俺も同じようにこの空を飛んで世界を見た時、この世界は俺の目にどんな風に映るんだろうか。）」

ISがこの世にその姿を現した時、この世界は変わつた。特にこの世界に住んでいる人々の考えが大きく『歪んだ』。

たとえどんなにその人が優秀でなかつたとしても、ただ「女性」であるという理由だけで厚遇され、どんなに優秀であつたとしてもただ「男性」であるという理由だけで冷遇され、虜げられる世界になつてしまつた。

ISが女性にしか使えないことによつて…

そんな歪んだ世界の中に発生した俺というIS操縦者。  
インギュラー

ISの登場によつて虜げられ続けてきた男性にとつては俺は男性の地位回復に対する一縷の希望、優遇されてきた女性にとつては現在おじいちゃんおじいちゃんおななつち

の地位を搖るがす脅威であり、排除すべき存在。そして一部の者にて  
つては観察対象であり、IS世界大会2連覇といつ偉業を成し遂  
げた織斑<sup>ブリコンヒルデ</sup>千冬の弟といつ存在…

「（俺がどう動き、どの陣営に所属するかによつてこの世界が再び  
変わることの可能性は極めて大きい。…まあ、一番最後の選択は何があつ  
ても選ぶことはないけどな。）」

そう考へながら一夏は左手につけている時計を見て時間を確認する。  
現在9時50分、2コマ連続での同一授業を採用しているこの学園  
の2时限田の授業がもう少しで終了する何とも際どい時間帯。3・  
4时限の授業もサボるうかなどと考えたりもしたが、一夏は今回の  
任務が「学生をしながら」であることを思い出し、次の授業は最低  
限のマナーとして、出席だけはしようとした決めた。

太一さんやタヌキさんなら「学生の本分はその生活を楽しむこと」に  
あり、その楽しみ方には授業を抜け出してこつそり学食に行つたり、  
昼寝して授業をすっぽかすといったものが含まれていて当然であ  
る。」などととことん自論を持ち出しかねないけど…

しかし、授業終了まではあと20分、そして次の授業まであと40  
分もある。授業終了と同時に教室に入つてもいいが、それから20  
分何をして過ごせばいいかがわからぬ。廊下から好奇の目で見続  
けられるのも精神的に辛い。それならいつそ授業開始ぎりぎりまで  
ここで空でも眺めているかなどと一夏が考へていると…

「…」じんなんとこひこいましたのね。」

屋上に一人の生徒がやってきて一夏に話しかけてきた。

この学園に通う生徒で一夏が知っているのは二人。一人は太一さん経由で知り合ったイギリス人の女の子、そしてもう一人は…とある人物を思い出してしまったため深くは考えないでおこう。そして現在、一夏に話しかけてきたのは前者。自分と同じ魔導師の道を歩み、代表候補生という立場からESについて調査することになっている、俺の良きライバルであり良き相棒…  
パートナー

「セシル…いや、ここではセシリ亞と呼んだ方がいいのかな。」

そこに立っていたのはイギリスの代表候補生、セシリ亞・オルコット・グレアムであった。

## 第5話「相棒」（後書き）

ここではようやくセシリアが登場。読者の方も大方予想していたとは思いますが、セシル＝セシリアでした。

しかし題名が「相棒」なのにセシリアの登場が最後のワンシーンだけというのは…この点については反省しております。

次回以降は題名と内容がかみ合ったものになるよう注意します。

### 第6話「意図」

久しぶりに再会を果たした一夏とセシリア。再会した一人は今回の任務が言われたような簡単なものではないことに気付き、その裏に隠されたものを考える。

## 第6話「意図」（前書き）

「魔導戦記リリカルなのはStratos」の連載開始から2日、累計PVが20000を超えました。

魔導戦記リリカルなのはStratosを読んでくださった皆様、本当にありがとうございます。出来る限り早いペースで更新していく意気込みですのこれからもよろしくお願いします。

それでは本編スタート。

久しぶりに再会を果たした一夏とセシリ亞。セシリ亞は任務を言い渡された時から思っていたある疑問を口にする。

魔導戦記リリカルなのはStratos 第6話「意図」、始まります。

## 第6話「意図」

「セシル…いや、『』ではセシリ亞と呼んだ方がいいのかな。」

そこに立っていたのはイギリスの代表候補生、セシリ亞・オルコット・グレアムであった。

「今まで通り、セシルと呼んでいただいて構いませんわ、一夏さん。」

他人行儀ではなくいつも通りの接し方をセシリ亞…いやセシルは要求した。だから一夏もそれに応え、今まで通りセシルと呼ぶことにした。

「わかったよ。ところでセシル、今はまだ授業中のはずだけど、教室を抜け出してよかつたのか？…まあ、一番最初に出て行つた俺が言つのもおかしいかもしねいけどさ。」

「2時間目の授業は自習になりました。みなさんがあんな状態で授業を進めても何の意味もありませんからね。それと、一夏さんに聞きたいことがあつたんですけど、出席簿を蹴り飛ばした際に魔法を使いましたよね。使用したのは身体強化と右足の加速といったところでしょうか。」

「やっぱり気付いてたか…使った魔法も言ひ通りだよ。やっぱりセシルはす”こな。」

「伊達に優秀な先生に鍛えられているわけではありません。ですが一夏さんの並列処理能力の高さも素晴らしいものだと思いますよ。最大15の情報を処理できる方なんて管理局中探しても数えるくらいしかいないでしょうし。」

「だけど、8個以上の情報を並列して処理すると思考に意識を集中させるトコが問題だな。太一さんからその癖を直すように言われてるけど、そう簡単には直らない。自己紹介の時もそれが原因で山田先生が呼び掛けてたのに気づかなかつたわけだし。」

「そうだろうと思いました。やっぱり、癖を修正するといつのは難しいものですね…それはそうとして一夏さん、今回の任務ですが、おかしな点があると思いませんか？」

セシルは知人の話で盛り上がろうとしていた話を切つて、今回言い渡された任務について一夏に問いかけた。彼女は何か思つところがあるらしい。

「おかしな点？任務の内容に関しては特別変なところはなかつただろ？俺もセシルも学生をしながらこの世界の状況…俺は世間の人々の考えを、セシルはＩＳを操縦して得られる情報を集めて報告する。

特におかしいところはないじゃないか。」

「ええ、『任務の内容』については特に問題はありません。問題なのはその任務の中身つまり、重要度です。」

「重要度？」

「情報を集めるだけでしたら私たちではなく機械に詳しい『バイスマイスター』やランクの低い局員、現地の調査員でも対応できたはずです。けれど今回の調査にはAランクの私達が選ばれた。とするとこの調査には何か裏があると踏んで間違いはないでしょう。」

展開されるセシルの自論。だが、彼女の自論は決して間違っているとはいはず、むしろそう考えるのが妥当であるかのように思われる。

「言われてみれば確かに任務の内容が軽すぎる。本局も地上本部もそんな簡単な任務にAランクの魔導師を一人も割けるほど人員に恵まれているわけじゃない…けど、どうして俺達なんだ？もしその考えが正しいとして、この任務の裏側に大きな事件が隠されているのなら、現地出身という理由だけで俺達が選ばれたはずはない。」

「それは私も考えてはいるのですが、答えが思いつかなくて…」

しばらく黙つて考える一人。一夏はこんな時、太一さんやなのは姉が俺達の立場にいたのならどう考えるのだろうかと考えよつとした時…

ん、太一さん…？

そのワードが一夏の頭に引っかかり、そしてその答えを導き出した。

「セシリア、太一さんたちだ！俺達の知り合いには管理局でも数少ないAAAオーバーの魔導師や騎士の知り合いがたくさんいる。もし俺達だけで対処できなくなつたとしたら、俺達を助けるためにみんなが動こうとする。だから俺達なんだ。」

もしこの仮定が正しいものだとするなら、この任務はやはり簡単なものではなく、もしかしたら世界を…いや次元世界を巻き込んだ大事件に発展しかねないことに一人はここで気付いたのだった。

## 第6話「意図」（後書き）

もし一夏とセシリ亞の考えたものが眞実であるとしたら、管理局は  
とんでもない組織つことになります。作者は「なのは」のアニメ  
は好きですけど、管理局の「優秀であれば10歳にも満たないよう  
な少年・少女達を戦場の中に放り込む」という考えは嫌いです。で  
すが、今回の話の都合上、管理局という組織についてはそのような  
立場に立つてもらうことを予定しています。

## 第7話「幼馴染」

導き出された答えに一人は恐怖し、警戒を怠らないことを決意する。  
そんな一夏の下に彼のもつ一人の幼馴染が姿を現す。

## 第7話「幼馴染」（前書き）

あまりの出番のなさに腹を立てたタヌキはついに作者の夢の中にまで現れてやりたい放題…皆さんもタヌキには十分注意しましょう（笑）

それでは本編をどうぞ。

たとえそれが推測の域を出なかつたとしても警戒を怠らないことを決意する一夏とセシル。そしてセシルと別れた一夏の下に彼のもう一人の幼馴染が姿を現す。だが、彼女との会話で落ち着きを取り戻しつつあつた一夏の心は再び乱されてしまう。

魔導戦記リリカルなのはStratos 第7話「幼馴染」、始まります。

## 第7話「幼馴染」

「私たちの考えが正しいものだとするなりばーの任務は最悪の場合、この世界…いえ、次元世界を巻き込んだ事件に発展する可能性があります。ですが、確たる証拠がない現時点では、これはあくまでも私たちの推測でしかありません。」

「そうセシリアが言った直後、2時間目の授業終了を知らせるチャイムが鳴る。」

「だけど、警戒しておくに越したことはないだろ。特に俺というイレギュラーも発生してるわけだしな。」

「ええ、準備していたのとしていいのでは対応にかかる時間も大きく違いますし、お互いに気を付けていきましょう。何か気付いた点があれば連絡を、私も気づいた点があれば連絡いたしますので。…ではチャイムも鳴りましたし、私は教室に戻ります。一夏さん、3時間目からはきちんと授業に出てくださいね。」

「わかつてゐよ。サボりすぎたら何言われるかわかつたもんじゃないしな。」

セシルは俺のその言葉を聞いてから俺に頭を下げて屋上を後にした。そして俺もセシルと話して気分も落ち着いたし、いい加減教室に戻

るかと思い、ドアに向かつて歩き出そうとした時、閉まっていたドアが勝手に開いた。勿論、閉まっていたドアがひとりでに開くなんてことはまずあり得ない。となると誰かが屋上にやつってきたということになる。

最初はセシルかと思ったのだが、やつてきた人はセシルではなかつた。

「…」

やつてきたのは一夏のもう一人の知り合いであり、E.Sを開発し、女尊男卑という歪んだ世界をつくりだした人『犯罪者』の妹・篠ノ之箇だつた。彼女は俺の近くまで歩いてくると口を『へ』の字にして腕を組んで動かなくなつた。「何か私に言うことがあるだろ?」とでも言いたげな顔をして。

だが、当の一夏はどうと彼女に對して特に言つことなどなかつた。もしいう言葉があるとすれば「黙つて立つなら端でしろ。通行の邪魔だ。」である。

「…」

依然として腕を組んで立つたまま動こつとしない箇…いや、指がトントンと動いていた。俺が何も言わないことに苛立つてゐるのだろう。

「（…何も言ひつむりがないなら田の前に立つなよ。それに時間の無駄だ。）」

だから一夏は何も言わずにただ立つているだけの彼女を置いて屋上を去ろうとした。だが、彼が彼女の隣を通り過ぎようとした瞬間、彼女に手をつかまれた。

「…6年ぶりに再会した幼馴染に一言も声をかけず、しかも黙つて置いて行こうとするとは…見損なつたぞ、一夏。それに、千冬さんへのあの態度は何だ！3年ぶりに再会したのだから、もつと違った言い方があつたのではないか？あと、私が屋上に来るときにすれ違つたあの女、一体誰だ！クラスメイトなのはわかる。しかし、そこが重要なのではない。一夏、あの女とはいつたらいどうこう関係なのだ。それに名字もだ。なぜ『織斑』ではなく、『高町』になつているのだ？誘拐されてからの3年間にいつたい何があつたのだ！」

腕をつかんだかと思えば今度は罵声とともに矢継ぎ早に浴びせられる質問。そしてそれを聞いて湧き上がる彼女への怒り…

「一夏、私の質問を聞いて」「つるせえつー…」「

我慢の限界だった。彼女は自分の都合しか考えていない、相手のことをなんて一切考えていない…だから一夏はキレた。

「6年ぶりに再会がどうした！お前は俺が誘拐される前の3年間ですら、手紙も電話もメールも一切して来なかつたじゃないか！出来なかつたなんてのは言い訳だ。学校へ行く途中や政府の人の目を盗んで送つたり電話したりすることは出来たはずだからな。なのにお前はそれをしなかつた。」

「そ、それは……」

「それに家族でもないお前が俺の名字……いや俺の家族のことや交友関係について口出しする権利なんてない。お前は俺の家族でも保護者でもないんだ。ほつといてくれ！」

そう言い残し掴まれていた腕を振りほどき、一夏は屋上を去つた。セシルと会話して落ち着きを取り戻していた一夏の気分は一人の少女の身勝手な振る舞いによつて再び最悪な状態へと逆戻りしてしまつた。

## 第7話「幼馴染」（後書き）

原作の一夏であれば自分から彼女に話しかけていましたが、本作では短い間であっても高町夫妻から愛情を注がれて育つたことや多くの人の触れ合いによって一夏の性格に変化が生じたという設定としています。「出会いによって人は変わる」ということは作者も経験してきたことなので、「理解いただければと思つております。

### 第8話「条件」

クラス代表として名前の挙がるセシリ亞、だが彼女はクラス代表の役職を受け入れる条件として一夏との決闘を要求する。

## 登場人物紹介 その2（前書き）

その1に続いての登場人物紹介です。

今回はセシルと謎の青年（太一）の追加情報、そして現時点での篠ノ之姉妹の情報について載せています。

セシリア・O・グレアム：イギリスの代表候補生。両親は優秀な魔導師だったが仲間をかばつて死亡した。両親の死後は父の上司であつたギル・グレアム（現在は退官）の養女となる。ミッド式空戦Aランクの優秀な魔導師であり階級は空曹。一夏の良きパートナーであり良きライバル。愛称はセシル。

篠ノ之篠：I.Sを発明した篠ノ之篠の妹。世界で初めてI.Sを起動させたとして高町一夏の写真がニュース番組映し出されたのを見て彼が第2回モンド・グロッソで行方不明になつてゐる自分の初恋の人、織斑一夏であることに気付く。入学初日に6年前なぜいなくなつたのか、なぜ名字を変えたのか、あの女は一体誰だなどと一夏に詰問するが、「家族でもないお前に俺の家族や交友関係について口出しされる理由なんてない」と一蹴されてしまう。

篠ノ之篠：I.Sの発明者にして、本人の意思があつたかは定かではないが女尊男卑の世界を作つた張本人

鎌藤太一：一夏を助けた青年であり、一夏がI.Sを起動させたことを知り大爆笑した人。なほの恋人で今年で2年目。去年までは高校に通いながら局勤めをしていたが、高校を卒業した今年から管理局に正式に入局。非常に優秀な魔導師であるが、手加減といつもの知らないことで敵・味方問わず有名（本人としては抑えているらしい）。地上本部に籍を置いてはいるが、大規模犯罪が発生しない限り、基本的に3提督やレジアスの話し相手しかしていない。これ

は彼が非常に扱いにくいことに起因している。恋人のなのはが「本<sup>う</sup>局の白い悪魔」と言われていることに対し、自身も「陸<sup>おか</sup>上に住む地獄の番人」の異名を持つ。（タヌキ情報）

## 登場人物紹介 その2（後書き）

現在第8話の修正、それ以降の物語の考案・執筆中です。  
最新話につきましてはもう少しお待ちください。

## 第8話「条件」（前書き）

～皆さんへのお知らせ～

連載から3日、累計PV数が5万、お気に入り登録数も150件を  
超えました。

「魔導戦記リリカル」のはStratosを読んでいただいて本  
当にありがとうございます。

ご意見・ご感想がある方はお手数ですが「感想」欄にお願いします。  
質問につきましては回答可能な範囲内で、できる限り早くご返答し  
ていくつもりです。

それでは本編をどうぞ。第8話は今までの話よりも内容量が多くな  
っております。

クラス対抗戦の代表として推薦されたセシリ亞。彼女はその役職を  
受け入れるが、受け入れる条件として一夏との決闘を要求する。セ  
シリ亞はなぜそのようなその条件を要求したのだろうか？

魔導戦記リリカルのはStratos 第8話「条件」、始まり  
ます。

## 第8話「条件」

「 であるからして、IISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIIS運用をした場合は、刑法によつて罰せられ 」

すらすらと教科書を読み上げていく山田先生。

時間は進んで4時間目。3・4時間目の座学はIISの運用に関する基本的な知識について。これは入学前に配られた参考書に書かれていたことであり、誰もが覚えていはるはずの内容であるため、手を挙げて質問する生徒など一人もいるはずがない。

滞りなく進む授業。しかし、その授業が行われているその教室の空気は明らかに異質だった。多くの生徒が手を動かしておらず、ただじっと座っていた。恐らくは何をしたらいいのかわからないのだろう。

憧れだつた織斑千冬のモンド・グロッソ2連覇の裏側に隠された真

実…それを知つた彼女たちは当初、その真実を認めようとしなかつた。事実なのかを確認しようにもその当事者である織斑千冬が自習を言い渡して以降教室に戻つてきていないため、確認することもできない。だが、彼 高町一夏 の怒り方が普通ではないことを考えると真実であつたと認めざるを得ない。

沈黙…それが教室を支配していた。頑張つて授業をしていた山田先生もさすがにどうにかしなければと思い、進めていた授業を切りがよーとこりで中断する。

「えつと…そ、その…み、みなさん。気分転換…というわけじゃないんですけど、授業はここで中断して今から再来週に行われるクラス対抗戦の代表を決めませんか？このままの状態で授業を進めても皆さんあまり、集中できていませんし。今ここで決めるのが嫌な人つて…いるかな？いたら手をあげたり首を横に振つてほしいな。」

話題を学校行事に変え、意思表示をさせることで生徒のモチベーションを上げようと努力する。そして、話題変更に反対する生徒がないことを確認して山田先生は話を進める。

「いない、みたいですね。ではそのまま話を進めていきますね。クラス代表者とはクラス長とおなじものだと考えてもらつて結構です。クラス対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席といった仕事も引き受けさせていただくことになります。代表者は自薦でも他薦でも構いませんが、代表に選ばれると原則として代表が変わることはないので、このクラスの中でだれが適任かをしつかりと見て代表者を決めていきましょう。ちなみに、今回の対抗選で優勝すれば、食堂のデザートのフリーパス券がクラス全員に渡されます。去年は半年だつたんですけど、今年は1年間のフリーパスになります。」

「山田先生、それは本当ですか？」

沈黙が支配していた雰囲気の中、山田先生の授業を眞面目に受けていた数少ない生徒の一人の鷹円さんがその言葉に反応する。

「ええ、職員会議で学園長がおっしゃっていたので間違いありませんよ。」

「それならグレアムさんを推薦します。グレアムさんは代表候補生なので、実力については申し分ないと思います。」

「おー、鷹つちはセッサーを選んだか。私としては大穴の高やんもいこと思つたけど、ここは私もセッサーを推薦す。」

鷹円さんがセシルを代表に推薦。そしてそれに追随するように本音も「高やん」なる謎の人物の名をあげながらもセシルを推薦した。彼女は花より団子を選んだ。

「えつと、グレアムさんがクラス代表の候補者として推薦されていますが、他に誰かいませんか？自薦でも構いませんよ。」

ここでもう一度山田先生はクラス全員にほかに立候補者はいないのかを確認した。一夏の方を見て手を上げようかどうか悩んでいた生

徒も中にはいたが、手は上がらなかつたため、山田先生はセシルに確認を取つた。

「グレアムさん、クラス代表の候補者が現時点でグレアムさん以外にいないので、グレアムさんにクラス代表を引き受けて欲しいんだけど、それでいいかな？」

「ええ、クラス代表の役職を引き受けることには私は何も異存はありません。ですが、その役職を引き受ける代わりにお願いしたいことがあります。」

「お願い…ですか。学園側で準備できることや叶えられるものであれば、大丈夫だとは思いますけど…グレアムさん、そのお願いっていつたいなんですか？」

「クラス対抗戦までに一夏ちゃんとHARUによる試合をさせて下れ。」

セシリ亞の要求は情報や金銭といったものではなく、一夏との試合といつこのクラスの誰もが予測しなかつたことだった。

故にクラスがざわついた。

「た、高町くんとの試合…ですか！それは、アリーナと使用許可さ

え出でてくれれば出来ないことはないとは思いますがけど… 高町くんの機体の問題があるので、私の一存で決めることはできません。お昼休みの間に学園長に確認を取るので、返事はそれからでもいいですか？」

「はい、構いません。」

「わかりました。返事はできる限り早くするよつにしますね。ですが、グレアムさん、どうして高町くんとの試合を要求したんですか？ 試合をしたいのだったら、高町くんを推薦すればよかつた話なのに…」

「おっしゃりれる通り、機体の問題はあります、私が一夏さんを推薦すれば私と彼の間で試合が行われるのはおそらく間違いないでしょう。ですが、その試合に私が負けてしまった場合、機体の稼働データの収集という候補生の仕事の一つを十分に果たせなくなってしまいます。卑怯な手段だと思われる方がいらっしゃるかもしれません、私はイギリスの代表の一人としてこの学園に通っている以上、私に課せられた職務はすべて果たさなければならないのです。」

「おお～っ、セッサーかつこいい。」

「布仏さん、光栄です。」

本音がぱちぱちと両手をたたいて褒めたのに対してセシルもお辞儀をして返す。セシルがこのような考え方を持っていたことに一夏を含めたクラス全員が驚き、彼女と自分の意識の差を…責任感の差を感じる。だが、セシルが最後にこう付け加えたことによつてイギリス出身以外の生徒はその戦いの重要性によつやく気付き、そして後悔することになる。

「それに、光栄だとは思いませんか？男性として世界で初めてISを起動させた方と実戦に近い形で一番最初に戦つことが出来るのですから。」

## 第8話「条件」（後書き）

本作において彼女・セシル・は「策士」という言葉が当てはまるようなキャラとして行動してもらおうと思っています。専用機に自立起動兵器が搭載されているのであればそのような思考を持つていてもおかしくはないというのが（あくまでも）私の考えにあるので。また、一夏のヒロインですが複数ではなく一人に絞ります。ただし、なのはの登場人物がヒロインになることはありません。HSに出てきた人物の誰かがヒロインになります。

### 第9話「束の間の休息」

一夏は昼食の時、セシルが申し出た自分との試合に隠された別の意味を知る。

と言いながらも次回は番外編を入れる予定なので、第9話の更新はそのあとになります。

## side story 第1話「任務に隠された真実」（前書き）

本作はIISサイドをメインストーリーで、管理局サイドをサイドストーリーでその二つに含まれない話（おもに過去の話）を番外編と定義して物語を進めていきます。

### side story 第1話「任務に隠された真実」

局員の学力不足に悩む管理局のトップたち。学力不足が局員のデスクワークの効率、部隊内における「ミニミニケーション能力の低下」を招いていた。それを打開すべく彼らは一人の少年少女にとある任務を言い渡す。しかしその真意を知らない一部の局員は、彼らの任務内容に疑問を持っていた。

### リリカルなのはStratos side story 第1話「任務に隠された真実」

一夏の知らない太一とタヌキの中学校生活の真実がほんの少しだけ明らかになる。

新暦74年4月、場所は時空管理局ミニットルダ地上本部にあるとある部屋

その部屋では男性の三人と、栗色と金色の髪の二人の女性、そして服を着たタヌキ一匹が椅子に座つてお茶をしていた。

「あつちの時間だと入学式も終わつて、授業が始まつてゐるくらいかな…任務もそうだけど真面目に授業は受けてるかな、一夏。」

栗色の髪をした女性、一夏の義姉の高町なのはは部屋にかけられた時計を見てそう言った。

「多分大丈夫だろつ。中学の時、本当に授業を抜け出して食堂に力ツ丼食べに行つたそこのタヌキと比べてあいつはまじめな方だからな。」

「な、何やと太ーー太ーだつて何度も国語の授業サボつて屋上で寝てたやないかつー。」

「あのジイさんの国語の授業は念佛だつたからな。たとえ授業受けたとしても寝てるだろつ。といふか、俺と同じようにあの授業で

寝てたお前に言われる筋合いはない。…しかもタヌキの耳とシッポ生やした状態で寝てるような奴に。」

「誰がタヌキやーー！私は『キュート』な女の子や。タヌキの耳とかシッポなんてないつー！」

「ノリとシッポをモットーに生きてるセクハラタヌキだろ。」

「ムキーッ、毎回毎回私のことをタヌキ呼ばわりして…」

四人の前で繰り広げられる太一とタヌキ？の激論。一夏のことを心配していたはずだったのにいつの間にか話の内容がタヌキのことになっていた。しかし、これは日常茶飯事。無視しておけばいつかは終わることを四人は知っているため、一人と一匹のことは無視する。

「あの二人はほっておこう、どうせすぐに終わるだろうからな…それはそうと、一夏とセシリ亞がついている今回の任務についてだが、みんなはどう思う？…」

両肩にとげの付いた服を着た男性 クロノ・ハラオウン が残りの三人に質問する。

「私は何か裏があるのかなって思う。だって、Aランクの二人に任

せる任務にしては内容があまりにも軽すぎるものだから。」

その問い合わせして一番最初に答えたのは彼の妹であるフェイト・T・ハラオウン。彼女の意見はセシリ亞が考えていたものと一緒にあつた。だが、その意見にもう一人の男性 ヴェロッサ・アコース が疑問を呈する。

「確かに内容としては軽いものだね。だけど仮に、一人の任務に何か別の意図が隠されていて、それが次元世界を巻き込んだ大規模犯罪であったとしてだよ、それを彼ら一人で解決できると君はどうかい？」

「えつ……そ、それは……」

「無理だろうな。あの世界には一応、グレアム元提督、それにロッテにアリアがいるとはいえ、大規模次元犯罪をそれだけの戦力で解決できるはずはない。となると何を目的に一人が選ばれたかがわからぬいな……」

ヴェロッサの疑問にフェイトはすぐに答えを出すことが出来なかつたが、クロノはそれをすぐに否定する。だがそうするとやはりなぜ彼らなのかという疑問が残る。

ちなみにあの一人と一匹は、どうやら「あつち向いてホイ」で今回

の決着をつけているらしい……あ、タヌキが負けた。

「今日のタヌキはなかなか手強かつたな……それはそうとクロ助、四人で何の話してるんだ？」

〇一二 こんな恰好をしているタヌキをほつといて太一がクロノたちの会話に入つてくる。

「まったく、君というやつは……今話しているのはどうしてあの二人が情報収集という簡単な任務に就いているのかだ。このような任務は魔力を持たない調査員でもできる簡単な内容だ。となると裏があると考えるのが妥当だが、それが何か全くわからない。君はレジアス中将をはじめとする地上本部のトップたちから何か聞いていないか？」

「ああ、一夏とセシルの任務ことか。」

「太一君……君は何か知っているのかい？」

クロノの質問に太一はさらりと答える。その答えに部屋の端で「の」の字を書いているタヌキ以外の四人は疑問を持ち、ヴェロッサが代表して太一に質問を返した。

「レジアスのおっさん曰く「現地の情報は現地に住んでいた、もしくは現在もそこに住んでいる局員や嘱託にやらせた方がより厳選された情報が入ってくる」とのこと。それに、任務内容に『学生をしながら』って記述されてる点を考えると、『低年齢化による局員の学力低下の改善』ってのも考えてるんじゃないかな?最近、メディアで取り上げられてかなり叩かれてたことだし。俺は一応、高校卒業してから正式入隊したけど、なのはたちは中卒、ナカジマ三佐の娘は12歳で陸士学校に入隊してるんじゃなかつたか?陸士学校でも座学はやるけど、陸士学校は1年で卒業だから、学力の向上はあまり期待できない。そこで今回、あの一人を任務の一つとして高校に通わせ、学力をつけさせることにする。学力の向上によってデスクワークのスピードが上がつたり、対外交渉で今までよりも良い成果が上がれば、それが管理局員の新しい選定基準になる。今回あの人選ばれたのは「一人が現地出身であること」と「本来ならば高校に通う年齢であること」の二つだろう。」

「考えもしなかつた太一の答えに四人は驚いたが、クロノとヴェロッサはすぐさま理解する。

「今まで僕たちは『学校へ通い勉強する』ということを任務と考えていなかつた。だが、それが指令なら任務の内容は軽くはない、むしろ重要であるといえる。」

「それに、メディアが叩いてきた管理局の課題の一つも消えるわけだから、一石二鳥…ということになるね。」

「ただ面倒なのは、一夏とセシルが任務についてクロ助たちと同じように深読みしすぎてないかだな。多分、任務を言い渡した上司もその意図に気づいてないだろうし、セシルはかなり頭が切れるから……否定はできない。」

「「「……」」

解決した……と思った矢先にまた発生する問題。一夏たちが深読みする前に太一たちはそのことを伝えることはできるのだろうか……

## side story 第1話「任務に隠された真実」（後書き）

以上、side story 第1話でした。

side storyや番外編は不定期更新になりますが、基本的に本編のキリが良いところで進めていく予定です。

サイドストーリーや番外編を更新する場合はその前の話のあとがきに必ず一言お知らせが入ります。

次回は本編に戻ります。

誤字脱字がありましたらお知らせください。勿論、感想も何かありましたら感想欄にお願いします。それでは。

## 補足説明（前書き）

感想に様々な疑問が挙げられましたので、最新話の更新の前に補足説明を入れさせていただきます。

## 補足説明

Q1・高町夫妻に育てられながらも一夏がやや子供っぽい点について

一夏は約3年間、高町夫妻の愛情を受けながら育ちましたが、彼の心を成長させたのは高町夫妻だけではありません。兄や姉、彼が通つた学校で出会った友達や仲間、そしてフェイトやはやてなどの姉の友人ととの出会いも彼の成長に影響を与えていました。

たとえ同じ人に育てられたとしても、出会った人、その人と出会った時期が異なれば性格も異なるのは仕方ないことです。また一夏の年齢上、周りの影響によつて正確に変化が出てくる時期があるので、そこまでおかしくはないと私は思います。

一夏が教室で怒つたり、篠にキレるシーンにつきましては、もしあの場面において千冬が3年前の自らの行為を謝罪していたのであれば、篠がもう少し一夏のことを考えて発言していれば、クラスの雰囲気や彼女らの関係が悪くなることはなかつたでしょう。しかし、この物語において二人とも自らの行為の非を謝つたり認めることが、自分の主張ばかりしたり、その主張を相手に押し付けたりしています。

どんなに一夏が精神的に大人になつてきているとしても、そのような人を前にしたとき、常に冷静でいられるでしょうか。私達ですらあまりできることを小説の登場人物だけはできるというのはいさか都合がよすぎる気がします。

Q2・エリオと一夏の境遇は似ているがなぜ呼応まで性格が異なるのか

これはあくまでも私の考えですが、一夏とエリオの境遇は似ているようで似ていません。

二人とも家族に裏切られてしまつたといつ点は似ています。ですが、エリオは特殊な生まれ方をしながらも、両親の愛情を受けて育つていました。しかし一夏は両親の記憶がありません。

またエリオは研究者によつて連れ出され、研究対象として施設に軟禁されていたところをフェイトに助けられましたが、一夏は研究対象にされていたわけでも、フェイトに助けられたわけでもありません。

Q3・姉への恨みについて

信頼関係といつものは築き上げるのには非常に多くの時間を費やしますが、壊すのは一瞬でできてしまします。どんなになのはたちがフォローしていたとしても簡単に回復するものではありませんし、もし回復していたとしても3年ぶりに再会した姉が自分に対してもうこのような振る舞いをするのであればまた一瞬で壊れてしまします。

Q4・「局員の学力低下は訓練期間を期間を延長することとで解決できる」という指摘について

就学プログラムをつけたり訓練期間を延ばし、就学期間を延ばすという方法は確かに考えられます。ではなぜそれを管理局がしなかつたのか、たとえばスバルとティアナの訓練校への入学とエリオの入隊の間には約3年の差が存在したのになぜ改善されていないのか。

改善されない理由には人員不足に悩む前線部隊の反発があると私は考えます。

訓練期間を延ばせば確かに学力は向上するでしょう。しかし、伸ばした期間は新人が入つてこないため、多くの部隊は現行の人数で任務をこなさなければなりません。

そこにはによる長期離脱や退職する人が出てくれば、その人たちの仕事も少ない人数でカバーしなければならなくなります。

期間を延ばせば学力低下をたく人たちはいなくなるでしょう。しかし、それによって今度は人員不足によるミッドチルダの治安の低下が発生すれば今度はその点をメディアは叩くのです。

しかも、人材不足に悩む部隊に訓練期間延長を納得させるためには具体的な根拠、つまり実績が必要になります。しかし、その実績は管理局の中でもそれなりに知られているものでなければなりません。名も知らぬ局員であれば「もともと優秀だった人を使ったパフォーマンス」と評価される可能性もあるからです。

一夏は幼いころから両親がおらず、比較的貧しい生活を送つてきました。しかし、彼は鎌藤太一という管理局でも有名な魔導師に保護され、高町なのはの両親の下で育てられたことから局の中、特に部隊長たちの間ではある程度は名前が知られています。

「貧しい家庭で育つた彼は勉強することでここまで優秀になつた」これは管理局にとって非常に効果のある宣伝になり、部隊長たちも

認めざるを得ない実績にもなるのです。

セシリ亞については「優秀な人もさらに努力すればよりよい結果が  
出せる」という意味合いがあると考えてください。

## 補足説明（後書き）

以上を補足説明とさせていただきます。

今後もご質問がありましたら回答いたしますので、疑問点がありま  
したら感想欄までお願いします。

## 第9話「束の間の休息」（前書き）

皆さんへのお知らせ

本編とは関係ありませんが、とある件につきましてお伝えしたいことがありますので私のユーズページにあります活動報告欄にも目を通してください。よろしくお願ひします。

ユーズページへは「小説情報」「作者名」で進むことが出来ます。

それでは本編に入ります。

一夏は昼食の時、セシルが申し出た自分との試合に隠された別の意味を知る。その意味とはいつたい何なのであろうか。

魔導戦記リリカルなのはStratos 第9話「束の間の休息」、  
始まります。

## 第9話「束の間の休息」

「…といひでセシル、やつきの発言の」とだけ、何か別に目的があるだろ？」

場所は変わつて食堂。一夏はセシルと食堂で廻食をとつていた。食べているものは一夏がスペゲッティとサラダ、セシリ亞が日本食：どこのどつつくつ込んでいいのかわからない。

「別の目的と申しますと…」

「代表戦前に俺と戦う理由つて言つた方がいいのかな、それは代表候補生としての職務を果たすことと世界で最初に俺と戦えるつてことだけじゃないだろ？」

「一夏さんはなぜそのように呟いたのですか？」

「世界で最初に俺と戦えるつて発言をしたときのセシルの事だな。」

「…ですか。」

「ああ。あの時のセシルの事は「」の試合にはそんな意味も隠され

てこる」というよりもむしろ「それとは別の目的もある」と言つて  
るようになんには見えたんだ。山田先生やクラスメイトがあの時俺と  
同じ考え方を持っていたのかや実際にセシルがそう思つていたのかは  
わからないけど、俺にはそんな風に見えた。

「…」

持つていた箸を丁寧に置き、黙り込むセシル。俺たち一人の様子を見ていた生徒たちも「こきなりどうしたのだろう」といつた表情をしている。だが、そんなことを俺は気にすることはない。俺が知りたいのはセシルが何か別の目的を隠しているのではないかということだけ。

セシルはそれからもじばらくは黙つたままであつたが、ついに口を開いた。

「集中しきると周りが見えなくなつてしましますのに、一夏さんはどうしてそのような些細なことには非常に鋭いのでしょうか。」

「つまり、俺の考えはアタリつてこといいんだな。」

「一夏さんがおつしゃつていた通り、あの試合にはまだ別の目的があります。その一つが男性が操縦するエリと戦う場合と女性が操縦するエリと戦う場合では得られる情報がどのように異なつてくるの

か。そしてもう一つが一夏さんがIISを動かす」とよって得られる情報を収集することです。」

「前者については分かるけど、俺がIISを動かすことによって得られる情報の収集は俺がする仕事だら?セシルがする必要はないはずだぜ。」

「ええ、その内容については一夏さんが調べるべきものです。ですが一夏さん、もしここで戦わなかつた場合、次に戦うのはいつになるでしょうか。」

「それは…」

「行事予定に変更がなければ学年別トーナメントとなります。授業において飛行訓練や模擬戦を行つことはあるでしょうが、最初は基本動作の確認がメインになるはずですので、そこまで進むのにはしばらく時間がかかります。となりますと、一夏さんが得られる情報が少なくなつてしまいませんか?」

「言われてみればそうだな。」

「ほほ間違いなく通るとは思いますが、私の申し出が通つて試合をすることが決まり、「どちらも可能性は非常に高いことですが、一夏さんが専用機を受領されることになれば放課後や休日を使って

「訓練したり模擬戦をする」ことが可能になるため、多くの情報を集めることができます。」

「試合の別の目的については理解できたけど、セシルはどうして試合の開催や俺への専用機の受領がほぼ間違いなくあると断言できるんだ？」

「それは簡単です。各国のトップの方々は一夏さんの…いえ、男性が操縦するI-Sに関する情報を欲しがっているからです。しかも一夏さんはその一人目。各国から自国の専用機をぜひ使って欲しいという申し出は必ずあるでしょう。自国のI-Sを使っていただければそれが国の宣伝にもなりますし、他国を引き離す材料にもなりますから。」

この言葉を聞いて一夏はセシルの先読みの能力を改めて「すごい」と感じるのだった。

## 第9話「束の間の休息」（後書き）

深読みしそうかる点が玉にきずはあります、本小説でセシルはかなり活躍するよていです。福音戦は白紙からのスタートとなつてありますが、対ゴーレム戦や対ラウラ戦ではきっといい活躍をしてくれる…はず。

### 第10話「専用機」

セシルの申し出は彼女の予想通り許可され、そしてその試合に臨む一夏には学園側から専用機が与えられることが伝えられる。

それから、こちらは私の都合で非常に申し訳ないのですが、お正月が明けて大学が再開しましたので、更新ペースが最初よりも遅くなります。最低でも1日に1回は更新していく予定ですが、読者の皆様、更新ペースが遅くなってしまう点につきましては大変申し訳ありません。

ご意見、ご感想がありましたら感想欄へご記入お願いします。

## 第10話「専用機」（前書き）

読者の皆様へ

「魔導戦記リリカルなのはStratos」を読んでいただいた際に  
本当にありがとうございます。おかげさまでお気に入り登録数が25  
0件を超えました。今後も精進していくつもりですのでこれ下もよ  
ろしくお願いします。

午後の授業に入る前、セシルと一夏の試合の許可、そして一夏への  
専用機の受領をクラスによく戻ってきた千冬が言い渡す。

魔導戦記リリカルなのはStratos 第10話「専用機」、始  
まります。

## 第10話「専用機」

昼食後、一夏とセシルが教室に戻つてくると午前中の授業に出てこなかつた織斑千冬の姿があるのに気付いた。その姿は2時間目に現れた時とほとんど変わらず凛としたものであつたが、心なしか彼女独自の威圧的なオーラがあの時に比べて小さくなつてゐるようになつた。夏は感じた。ちなみに山田先生は彼女の隣に控えめに立つてゐる。

黙つて立つていた千冬は午後の授業開始のチャイムが鳴つてから口を開いた。

「全員席に着いたようだな。午後の授業を始める前に既に黙つておかなければならないことがある。クラス代表を決める際にあつたグレアムの申し出についてだが、学園長から先ほど許可が出たため、グレアムの要望通り、代表戦前にグレアムと高町の試合を行う…また、それに関した内容だが、高町の機体は学園側で準備をする。」

「一夏に専用機が受領されることを聞き、ざわつくクラス。しかし、それを気にすることなく彼女は言葉をつづける。

「ただし、機体の受領は試合ギリギリになる可能性が高い。高町、試合までにEISに慣れておきたい場合は、学園が所持している打鉄カリヴァイヴを利用して調整を行え。本来、機体やアリーナ使用の申請は使用日の前日までに済ませておくことが規則なのだが、今回は特例だ。その日の午前中までに申請を出すなら、こちらで時間等

を調整して使用できるよつにしておく。また、試合は来週の月曜日の放課後に行う。グレアム、高町、一人とも異存はないか？」

言わなければならぬことを言い終わると千冬は俺とセシルの二人に質問があるかを尋ねる。

「試合についてはないです。けど、俺の機体の仕様はどのようになるんですか？近接メインの機体だつたらその手の武装の練習をしておきたいので。」

一夏は試合をするつえで重要である自分の専用機の特性について質問した。試合までに残された準備期間は1週間程度しか残っていない。正直な話、そんな短い期間で習得できることは少なく、どちらかと言えば付け焼刃なものの方が多いことは一夏は十分に理解していた。だが、たとえ付け焼刃であつたとしても、自分の機体の特徴にあつた武器の特性を少しでも知つておくことは決して損にはならない。逆に自分の機体の特徴にあつていい武器の練習をした方が今回の試合に向けた準備に限つた話をするば得られるものは少ない。勿論、その経験は長い日で見ればよいものなのかもしけないが、今回は準備期間があまりにも短すぎるので。

「詳細についてはまだわかつてないが、近接がメインであることだけは間違いない。」

「わかりました。」

「グレアムは何か気になる点はないか。」

「アリですね…できれば今回の試合はほかのクラスの生徒の観戦は許可しないよ。」  
「することはできないでしょ。」

「…理由を聞こつか。」

セシリ亞の提案に疑問を感じた千冬はなぜそのようなことをする必要があるのかをセシルに聞き返した。

「ほかのクラスの生徒の観戦が認められた場合、1年のクラスの代表の方々は必ずこの試合を見に来るでしょう。相手のクラス代表の機体に搭載されている武装がわかればクラス代表戦までにある程度対応策を考えることもできますから。もちろん、私は代表候補生ですのでもその程度のことで後れを取るほど弱くはありませんが、4組には日本代表候補生の方もいらっしゃいますし、念には念を入れておこなうと思いまして。」

その理由がV-Tシステムに代表されるような国際的に禁止されているシステムや兵器を搭載しているからではないことを理解した千冬はこう返事をする。

「…他学年の生徒については観戦制限を設けられるかはわからないが、1年については観戦制限をかけることにしてよ。他学年の件については決まり次第また改めて報告する。ほかにはないか？」

「それ以外にはありません。」

「それならば双方とも試合に向けてしっかりと準備しておくれよ。」  
「それでは山田先生、授業の方を。」

「あ、はい。わかりました。みなさん、お昼を食べたばかりでちょっと眠いかもしませんけど、ここでもう一度気を引き締めて授業に集中してくださいね。それでは教科書の6ページを開いてください」

1組の午後の授業は一人の試合の決定や一夏の専用機受領などの報告を経てようやくスタートしたのだった。

## 第10話「専用機」（後書き）

一夏の専用機につきましては完全オリジナル機体にするかそれとも白式のままで行くか非常に悩んでいます。それによつてはストーリーも変わつてくる可能性があるので、決定は慎重に行いたいと思います。

### 第11話「ルームメイト」

放課後、アリーナと量産機の貸し出し申請をした一夏は山田先生から寮の鍵を渡される。彼の同居人とはいつたいたい誰なのか。

## 第11話「ルームメイト」（前書き）

放課後、アリーナと量産機の貸し出し申請をした一夏は山田先生から寮の鍵を渡される。しばらくの間はホテルから通学するはずだったのだが、いきなりの変更に疑問を覚える一夏。いきなりの変更の理由は何か、そして彼の同居人とはいったい誰なのか。

魔導戦記リリカルなのはStratos 第11話「ルームメイト」  
、始まります。

## 第1-1話「ルームメイト」

授業が終わった後、一夏はすぐに職員室に向かい、機体とアリーナ使用の申請を行った。ISに関する知識に関して言えば、一夏はほのかの生徒に劣らないだけのものを持っているが、彼のISの操縦時間はこの学園に通う生徒の中でもダントツに短く、一桁有るか無い程度である。そのため試合前日ギリギリまで毎日ISを使って基本動作の確認や武器の呼び出しの練習を行うつもりだったのだが、日曜日のアリーナの使用が認められていないことや一夏よりも前にアリーナや機体使用の申請を出している生徒がいたことを聞いて、申請はまず3日間だけ申請を出すことにした。残りの日については後日、アリーナや機体申請の混雑状況を見ながら行うこととした。

申請後、カバンを持たずに職員室に来ていていたことに気付き、一夏は教室に戻った。教室に戻り、必要なものをカバンの中に入れている途中で山田先生が教室に入ってきた。

「ああ、高町くん。教室に戻っていたんですね。さつきまで職員室でアリーナ利用の申請書を書いていたのにいきなりなくなっていましたので探しましたよ。」

「山田先生、何か俺に用事があるんですか？」

「えっとですね、寮の部屋が決まったので、その部屋の鍵を高町くんに渡しに来ました。」

そつぱつて山田先生は手に持つた鍵を一夏に見せる。

「寮の部屋が決まつたつて：しばらくは日本政府が指定したホテルから通学するつていう話だつたはずですけど。」

「そうなんですけど、指定したホテルから通わせるよりも学園内から出でない方が高町くんの安全を確保しやすいということで、一時的な処置として部屋割りを無理やり変更したらしいんです。私達のところにもさつきその連絡が入つてきたので、急いで高町くんを探していたんですよ。」

「そうだったんですか、ありがとうございます。」

「いえ、私は高町くんのクラスの副担任ですから。…まあ、そういうわけで日本政府の命令もあつてとにかく寮に入れるのを優先したみたいです。今のところは相部屋になるんですけど、1ヶ月もすれば個室の準備ができると思いますから、それまでは我慢してくださいね。」

山田先生はそつぱつながら部屋の鍵を渡した。その後、食事の時間帯をはじめとする寮の規則などを聞いたのち、一夏は渡された鍵に書かれている部屋がある寮へと向かった。

「…あつ、ルームメイトが誰か聞き忘れてた。」

その途中で一夏は大切なことを聞いていないことに気が付く。しかし、もう目の前に寮が見えており、ここからまた職員室まで戻り、同居人が誰か聞くのは時間がもつたいたい。

「（…まあ、なんとかなるだろ。今までだつて部屋は違つたけど美由希姉やなのは姉たちと一緒に暮らしてきただし。）」

寮の前でしばらくなつたことはやつてしまつたことと割り切り、一夏は寮に入り、割り振られた部屋へと向かつた。

一夏は部屋の鍵を開ける前に中にルームメイトがいるのかを確認するためドアをノックする。これは一夏が高町家で生活してきた中で自然と身に着けたものだつた。義母の桃子さんから風呂に入るよう言われて脱衣所に行つたら、バスタオルで体を隠しただけの美由希姉やなのは姉、そして恭也さんの彼女である忍さんと遭遇したことがあつたからだ。

このような出来事が発生するたびに太一さんからは「ラッキースケベ」と言われ、恭也さんとは（一夏の）生死をかけた一方的な鬼ごっこをしたことはあまり思い出したくもない出来事である。この生死をかけた鬼ごっこは基本的に小太刀を持ち殺氣を放つ恭也さんから逃げ続けるといつものなのだが、遭遇相手が忍さんであった場合

に限っては恭也さんは飛針や鋼糸も使って追いかけてくるため、自分が向かう部屋に先に誰か入っていないかを確認せずにはいられなくなってしまったのだ。

「はい、どちら様でしょうか。」

ノックした後しばらくして中から返事があつた。一夏はその声を聞いて少し安心をする。その声は一夏が信頼している相手の声だったからだ。

「俺だよ、セシル。」

「一夏さん…ですか？少々お待ちください。」

その言葉とともにロックが外され、ドアが開いた。そこには制服を着たセシルの姿があつた。

「一夏さん、どういつたご用件でこの部屋に…？もづ、ホテルの方に戻られていたのではないのですか？」

一夏はセシルにあらかじめ自分がしばらくホテル通学になることは伝えていた。だからこのような質問が来るのは当然のことであった。

「本当はホテルからの通学だつたんだけど、日本政府が部屋割りを無理矢理変更して俺を寮に入れたんだつて。で、その部屋がココ。これからしばらく相部屋になるけど、よろしくな、セシル。」

## 第1-1話「ルームメイト」（後書き）

「意見・感想、お待ちしております。」

一夏の機体、本当にどうしようか悩んでいます。一応、両方とも学年別トーナメントまでの物語の構成はある程度できているのですが、臨海学校あたりからの流れが非常に難しいです。ただし、ここ数日中には決定すると思いますので、もうしばらくお待ち下さい。

### 第1-2話「通信」

部屋に入った一夏はセシルと同じ部屋で生活していく上での注意事項を確認し、今日までに集めた情報などを報告書にまとめて送信しようとする。しかしそんな時、一人に連絡をつないできた者がいた。

## 第1-2話「通信」（前書き）

一夏の同居人はセシルであった。一人は以前も同じ部屋で生活したことがあったため、この部屋で生活していく上での注意事項はすぐ決まった。そして今日までに集めた情報などを報告書にまとめて送信しようとする。そんな時、一人に連絡をつないできた者がいた。

魔導戦記リリカルなのはStratos 第1-2話「通信」、始まります。

## 第1-2話「通信」

「…なるほど。つまり今回の変更は一夏さんの安全確保のための行動ということですね。」

「山田先生はそう言つてたな。それから個室の準備が終わるのに1ヶ月ぐらいかかるらしいから、それまでセシリ亞に色々なところで迷惑かけることになるけど、それまでの間はよろしくな。」

「何を言つているのですか一夏さん、相部屋になるのはこれが3回目ですよ。2年前の夏と冬と一緒に受けました短期訓練プログラムをお忘れになりましたか?」

「ああ、そういえば、あの時期にそのプログラムを受けるのが俺とセシリ亞しかいなかつたから相部屋になつたんだつたけ?すっかり忘れてた。」

実はこの一人、同じ部屋で生活するのは今回が初めてではない。今までに2回、同じ部屋でしばらく生活をしていたことがあった。

1回目は一人が中学2年の夏に受けた嘱託魔導師試験とその後に行われた短期訓練プログラムで約1か月半、2回目がその冬に2週間程度かけて行われたデスクワーク研修である。

管理局には常勤の魔導師のほかに非常勤勤務の嘱託魔導師も所属している。嘱託魔導師は、士官学校や訓練校とは異なり入局の時期は決まっていなければ、希望して対応できる試験官がいればいつでも認定試験を受けることが出来るという利点がある。ただし、正規局員ではないため、悪いというわけではないが、どうしても正規局員と比べると待遇は良くはない。局員があまり行きたがらない本局から遠い世界での任務なども重大な事件ではない限り、まず最初に嘱託魔導師に頼み、その人たちが断つた場合、正規局員が出向くことが多い。そのこともあってか嘱託として働くというものは多くない。しかし、嘱託であってもしっかりと成果を残しているのであれば、その後に正規局員として入局した際も、好条件で入局できることも多い。

一夏を助けた太一はこの時期はまだ非常勤の嘱託魔導師として管理局に勤務していた。彼は今年正式に局員として入局したのだが、嘱託として多くの成果を残してきたこともあり、入局1年目から特別捜査官（武装隊では准佐扱い）という高待遇を得ている。

もちろん、本人の魔導師レベルや局員からの推薦（正規・非正規は問わないが実績や肩書がある者に限定される）なども考慮された形であるので、魔導師レベルによっては待遇は変わってくる。太一の場合はクロノ、リングディ、そしてなぜかレジアスから推薦を受けたことが大きい。

「もう、しつかりしてください。コホン…ともかく、約2ヶ月間一緒に生活してきたこともあつたのですから、一夏さんの生活習慣につきましてはある程度理解しているつもりです。思い出したのであればあの時に決めたルールも思い出しておりますわよね。」

「シャワーや就寝時間とかで良かったか？」

「ええ、覚えていたのでしたら今回もあのルールを適用しませんか？」

「新しいルール決めても俺は1ヶ月で部屋が変わるわけだし、それがいいな。ところでセシル、きょう提出の報告書つてもう書き上げた？」

「いえ、まだですわ。一夏をなんぼもつ済ませてしまっているのですか？」

「いや、俺もまだ。本当は午前中のうちにまとめておいて、ルームメイトがいないうちに送ろうかって思つてたんだけど、午後に報告しなきゃいけないことが増えたから、もう一回まとめなおしてから提出するつもりだよ。…でも、ルームメイトがセシルならこそ隠れて送る必要はないよな。」

「ええ、それは私も同感です。ルームメイトの方がいらっしゃるな」ときに急いでまとめたり送つたりする必要がありませんからね。」

「まあ、長話するのもいいけど、とりあえず先に報告書をさつと

書いて送りつけ。積もる話はそれからでも遅くはないしね。」

「そうですね、ではさっさと終わらせてしまいましょう。」

そういうて二人は報告書を書くためにディスプレイやキー・ポートを展開しようとした時、一夏に通信が入った。

「ん？こんな時に連絡が入るなんて…いつたい誰だ？」

そういうながらも一夏はその連絡をつないだ。

二人の前に一つのディスプレイが現れる。そしてそこにはある人物が映っていた。

「…おつ、繋がつた繋がつた。久しぶり、元気にしてるか一夏。」

その人は一夏を助けてくれた鎌藤太一であった。

## 第1-2話「通信」（後書き）

「…」でよつやく管理局サイドと本編が繋がりました。…まあ、ほんの少しでしたが。以前、サイドストーリーに関する「」指摘があつたので、できる限りサイドストーリーは書かないよう（重大な出来事があつた場合や、管理局側で問題が発生した場合を除きます）して、本編に登場させてこうと思います。

### 第1-3話「心情」

入学1日目に、自分にあつた出来事を一人の人物が考える。どうしてこうなってしまったのかを…

の予告からもわかるとおり、次回は回想回になります。

## 第13話「心情（前編）」（前書き）

第13話ですが、二人分を1話でまとめていましたが、追加修正が多くなったため、前編・後編と分けることにしました。ですので2話同時アップとなっています。

入学1日目に、自分にあつた出来事を思い返している人たちがいた。どうしてこのような結果になってしまったのかと…

魔導戦記リリカルなのはStratos 第13話「心情（前編）」  
、始まります。

## 第1-3話「心情（前編）」

3年前の世界大会決勝戦前に誘拐され、そのまま行方知れずになつていた一夏がIJSを起動させたという知らせを聞いた時、私は嬉しかつた。

弟が生きていた…ただ、それだけが嬉しかつた。しかし、実際にその姿を前にしてみると何と言つていいのかわからなかつた。

だから以前のように厳しく接してしまつた。「高町」などという名字は生きていこうえで仕方なく使つていたものだと思い、あんなことを言つてしまつた。

しかし、よく考えてみれば、この世界は当時12歳だつた一夏が3年もの間1人で生きていけるような世界ではない。一夏は女ではなく、『男』なのだから。

あんたが俺の姉であるものか

教室で私の弟が言つたあの言葉が私の心に重くのしかかる。

元をたどれば私が3年前、決勝戦前に一夏が誘拐されたことを知りながらも決勝戦を優先したことが原因なのだ。

言い訳に聞こえるかもしれないが、本当はあの時、ドイツから一夏が誘拐されたという情報が入ってきた時、決勝戦を放棄しても私は一夏を助けにいきたかった。

しかし、それはできなかつた。日本政府の者から止められたのもあつたが、束から「これはちーちゃんの2連覇を阻止するために決勝戦の相手の国が仕組んだバカなこと」と聞かされたからだ。

それを聞いた時、私は怒りに震えた。「これが世界を牽引してきた国がすることなのか」と。

だから私は決勝戦に出場することにした。「一瞬で沈めてそのまま助けに向かう」と心に決めて…

本当は大会本部にこの事実を伝え、試合を延期してもらえば良かつただけのことだつたかもしれないのに、そんなことを考える余裕は私にはなかつた。

私は愛機である「暮桜」を身に纏い、決勝会場へ向かつた。ISを纏い、すでに会場に姿を見せていた相手は、私の姿を見て驚いていた。私が決勝を放棄して一夏を助けに行くだろうと高を括つていたのだろう。

一瞬で片を付ける。容赦などしない

そう思い私は試合開始のブザーを待った。

しかし、物事というものは自分が考えているように上手くいくものではない。決勝の相手は私の戦い方をよく研究していた。踏み込み、回避、攻撃…私のパターンをかなり理解していた。私の登場に動搖しているとはいえ彼女もまた國家代表。その程度のことで崩れるほどヤワではない。

相手に苦戦しながらも私は何とか相手を倒し、すぐさま現場へと向かった。私の行動に会場はザワついていたが、そんなことを構つている暇はなかつた。

現場についてまず一番に目に飛び込んできたものはポツカリと大きな穴が壁に空いた廃工場『一夏の監禁場所』だつた。

それを見て私は嫌な予感は的中した。

そしてその予感は的中した。

その穴から廃工場に入つたが、そこに一夏の姿はなかつた。ハイパー・センサーを使って探してもみたが、一夏を見つけることは出来なかつた。

現場に倒れていた誘拐犯を叩き起こし、一夏の場所を聞き出そうとしたが、「青い閃光に包まれて気を失ったため、どこにいるのかわからない」としか言わなかつた。

信じたくなかった。

唯一<sup>一夏</sup>の家族がいなくなつてしまつたことを信じたくなかった。自分の軽率な行動がこのようなことを引き起こしたということを信じたくなかった。

その後、私は情報を提供してくれた礼としてドイツへ教育として出向した。

いや、違うな。正しくは私はドイツへ逃げたのだ。日本にいると…あの家に一人でいると一夏のことを、私の犯した愚かな行為を思い出してしまうから。

一夏、どうすればお前は私のことを許してくれるのだ…

…

寮の自室で悩む彼女  
織斑千冬  
のその内容に答えを提示する者は  
いない。

## 第1-3話「心情（前編）」「（後書き）

予想されていた方もいたとは思いますが、一人は一夏の姉であった織斑千冬でした。

次の話はもう一人の回想になります。

## 第1-4話「心情（後編）」（前書き）

2話連続更新です。早く一夏とセシルの試合を書き上げたい……と思っている作者です。そちらにましましてはもう少しをお待ちください。

今日の出来事を考えていたのは千冬だけではなかつた。もう一人とはいつたい誰なのか。

魔導戦記リリカルなのはStratos 第1-4話「心情（後編）」  
、始まります。

## 第1-4話「心情（後編）」

学園にまだ慣れていないこの時期、相手おんなから一夏に声をかけることはあるだろうとは予想していた。何せ一夏は世界で唯一ISを扱える男性おとめなのだから。しかし、知らない人ばかりのこの学園で一夏から別の誰かに声をかけることはほとんどありえない。もし一夏から声をかけるとしても、その人物は自然と『一夏がよく知っている人物』に限られてくる。

入学前、私は新入生の名前を見て、私と一夏が通っていた小学校の生徒が私たち以外に誰もいないことを確認していた。

それを知つて、『自分以外一夏から声をかけるような人はこの学園にはいない』と妙な自信を持つてしまつていた。そして、一夏が昔のあの優しい一夏のままであることを期待していた。

だが、実際に会つた一夏は違つた。3年ぶりに再会したはずの実の姉であるはずの千冬さんに一夏は喧嘩を売るような…いや、家族であることを拒絶するかのような口調で喋つていた。そんな一夏の姿を私は信じられなかつた。

あのような口調を一夏がするはずがない

私はそう思い、自嘲を言い渡された2時間目の授業を抜け出し、一

夏を探し、そして屋上で見つけた。

だが、一夏は一人ではなかつた。一夏はクラスメイトの女子と話をしていた。

どちらから話しかけたのかは、最初からその様子を見ていたわけではなかつたためわからなかつたが、千冬さんに対する態度とは違い、その女と喋る一夏の様子は、表情はとても柔らかいものだつた。一夏はその女と喋るのを楽しんでいるように見えた。その姿はまるで仲の良い友達と話すかのようなものだつた。

何だあの女は！なぜ一夏とそんなに親しく話をしている！

そんな思いが私を支配した。あの女が一夏と仲良く話しているのが許せなかつた。だから私は一夏の目の前に立つても、自分から何も言おうとはしなかつた。『幼馴染に自分から声をかけるのは当たり前だろ』『どうような顔をして黙つたまま立つていた。

だが最初に声をかけたのは私…いやあれば声をかけたという表現は正しくない。彼に罵声を浴びせたのは私だつた。黙つて立つていた私を置いて去ろうとした一夏を目の前にして我慢できなくなつてしまつていた。

そんな私に…自分勝手なことしか言わない私に一夏は怒つた。6年

ぶりに再会した一夏の口から発せられた言葉は私が期待していた言葉とは大きく異なるものだった。

本当は私は一夏の口から「久しぶり」「会えてうれしかった」といつた言葉が出てくるのを無意識のうちに期待していた。この6年間、私は一夏に対して何もしてこなかつたというのに…だ。今、『うやつて考えてみればあの場面では本来、私から声をかけるべきだつた。なぜなら一夏が私を探していたわけではなく、私が一夏を探していたのだから。…なのに私はそれをしなかつた。

誘拐されてから3年の間に一夏は大きく変わったように思えた。違う人になつたような気がした。昔の面影は残つていなかつた。

その逆に私は何も変わらなかつた。3年もあれば人は変わることがあることくらい容易に考えられたはずなのに、私は昔の一夏をずっと引きずついていたせいで変わつていなかつた。もし変わつたところがあるとすればそれは身体的なところだけだろう。

名字の「」と、国籍の「」と、誘拐されてから3年間のこと…一夏に聞きたいことは今でもたくさんある。だけど、変わつてしまつた一夏にどう話しかけていいのかわからない。

「私は…どうしたらよいのだ…」

ルームメイトが食事に出て行っている中、彼女 篠ノ之 篓は一人、  
部屋の中で考え続けていた。

## 第14話「心情（後編）」（後書き）

もう一人は篠でした。千冬と篠、この二人は過去と向き合い、変わつていけるのでしょうか。それによつては篠がヒロインになることもあり得る…かもしれない。

### 第15話「思い」

太一は一人に任務の本当の意味を話す。それを聞いた二人はこの任務をどう思うのだろうか。

## 第15話「思い」（前書き）

太一は一夏とセシルの二人に任務のもう一つの目的と彼の希望のぞみを伝える。それを聞いた一人はどう思い、どう感じるのか…

魔導戦記リリカルなのはStratos 第15話「思い」、始まります。

## 第15話「思い」

「久しぶり、元気にしてるか一夏。」

連絡を入れてきたのは一夏を助けた太一であった。

「「太一さん！」」

「ん、セシル？なんで一人が一緒に部屋にいるんだ？一夏、確かお前はしばらくホテル通学するって言つてたよな……ああ、セシルを部屋に連れ込んだのか。一夏、初日からなかなかやるな。」

「違います！今、一緒に部屋にいるのは日本政府が俺の安全確保のために強引に部屋割りを変更して俺を寮に押し込んだなんです。1ヶ月くらいすれば個室の準備ができるらしいんですけど、それまでは相部屋になるつて山田先生…えっと俺達のクラスの副担任の人が言つって、そのルームメイトがセシルだつたんです！」

太一がサラリと「一夏がセシルを自分の部屋に連れ込んだ」などと言い出し、それを慌てて訂正する一夏。しかも太一はその発言を一矢二矢せずに言つてゐたため、その言葉が本心なのか冗談なのか区別しにくい。

太一があいに手を当てて考へ出したため、ある程度この状況を理解したと一夏は思ったのだったが…

「…要は管理局だけじゃなくHS学園も一人の同棲を認めたということだな。確か今回で3回目の同棲だろ、サッサと結婚しろ、お前ら。」

それ以上の爆弾発言を先ほどと同様に平然とした顔で言つた太一がいた。

「いやいや、全然違いますからーそれに今までの2回も同棲じゃありませんから。」

「そ、そうですわ太一さん。し、しかも付き合つてもいませんのに…け、結婚だなんて…」

先ほど以上の爆弾発言に一夏とセシルは顔をやや赤くしながらも必死に否定した。

…いや、セシルは否定していない。

「まあ、冗談はほじほじにしておいて…」

「「冗談かよ！（ですの？）」」

一夏もセシルもさつきまでの発言が「冗談だった」とを知り、ツッコミを入れる。しかし太一は気にせず喋り続ける。

「半分ぐらいがな。…まあ、今からは本当に「冗談抜きの内容になるんだが、二人は今回の任務についてどう思つてる？」

その言葉を口にした瞬間、太一の口調が変わり、表情もやや真剣なものになった。

「それってどうこいつとですか？」

「特に他意はない。ただこの任務のことを一人はどう思つてこるのかが気になつてな。」

他意はないと言つてはいるが、一人は太一のこの言動から自分たちの考えが正しかったのではないかと思つた。

「やつぱりこの任務には裏があるんですね。実は俺達もこの任務に何か裏があると思って、その裏にあるものを考えたんです。それが…」

一夏はセシルと二人で考えたある仮説について太一に説明していく。任務がランクに会わないような軽いものであること、この任務の裏には別の目的…たとえば大きな事件が隠されているかもしれないこと、自分たちが選ばれたのは知り合いにAAAランクを超える優秀な魔導師がたくさんいることなど…

「…もちろん、これは俺達の推測の域を出てないんですけど、ありえない話じゃないと俺達は考えます。」

「…」

太一はその仮説を聞いてしばらくの間、黙っていたが、意を決したよついにその口を開く。

「…やつぱりそう考えてたか。」

しかし、その口から出てきた言葉は一人の考えていたものとは少し違っていた。

「さつき、クロ助…違った、クロノたちと二人の話をしてたんだよ。その時に、もしかしたら一人がさつき一夏が言つたようなことを考えてるんじゃないかつてことになつてな。セシルは一夏よりも頭が

切れるしな。今日はそれを確認するために連絡したんだが…予想通りだつたな。」

「えつ、違つんですか？！」

「全部が間違つてゐわけぢやない。間違つてゐるのは二つ。一人が考えたようにこの任務には別の目的があるのは間違いないけど、それは『裏に隠された事件』があるつていう意味ぢやないこと。それから、今回の任務が『一人が考へてゐるような軽い任務ぢやない』こと。これは俺がさつき話したことにも関係あるんだがな。」

「つまり、どうこいつことですか？」

「今回の任務の内容は『学生をしながら』の世界の状況や『IS』に関する情報を集めて報告すること』だった。この内容を聞いて二人は今回の任務で重要なところは『情報を集める』ことだと考へていた。だから任務内容が軽いと感じた…それで間違いないか？」

「ええ、間違いありません。」

「実はな、今回の任務で重要なのは『情報を集める』ことぢやなくて『学生をする』つてところにあつたんだ。」

そういうつて太一はレジアス中将が一人を選んだ理由、そして管理局が抱えている問題とその一つの解決策を説明した。

「要するに、俺達をその問題の解決法の実例…いわば広告塔にするわけですね。」

「あくまでもその一つのことだな。上層部は上層部で、他にもりいろいろ考へてはいるらしく。」

「広告塔ですか…何か、複雑ですか。」

「俺も、あんまりいい気はしないな。」

「まあ、上層部がどう考へていようとお前たちはお前たちだ。広告塔になるなんてことは気にしなくていい。嫌だつたら拒否することだつてできるんだ。俺はそんなことを気にするくらいなら一人に今回の一回の任務を楽しんできてほしいと思つてる。」

「えつ、任務を楽しんでくるつて…太一さん、どういう意味ですか？」

「もし一人が任務終了後…つまりE.S学園を卒業してから正式に入局するつもりならこれが最後の学園生活になる。それをただ任務を

こなすだけの淡白なものにして欲しくない。それに高校生活は人生に1度しかない経験だ。だから俺はこの長期任務が一人にとつて価値のあるものであつてほしいんだ。」

「「太一さん」」

「今から仕事だから通信はここで切るけど、そのあたりをもう少し二人は考えた方がいい。今後の人生のためにもな。それじゃ、またな。」

そういうつて太一は通信を切つた。

「今後の人生のため…か。そんなことあんまり考えたことなかつたな。」

「私もですわ。」

太一が最後に言つた言葉。それは一人が今まであまり考えたこともなかつたことだつた。だけど、もうそれを考える時期に一人は来ているのかもしれない。自分が進む道を決める瞬間が…

## 第15話「思い」（後書き）

今回の話は今までの話の中で一番長いものになりました。というのも、15話を書き上げた時に「太一が一人をいじる内容を入れたら面白いかも」と突然思い、前半部分に急速そのシーンを入れたからです。

修正した後に読み返して「こういうシーンもたまにはありだな」と思つたり思わなかつたり…

ご意見・ご感想、誤字脱字の報告は感想欄にお願いします。

### 第16話「初訓練」

一夏はアリーナで実機を使った初めての練習を行う。彼が選ぶ機体は打鉄か、それともリヴァイヴか

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2552ba/>

---

魔導戦記リリカルなのはStratos

2012年1月14日18時52分発行